

# お茶うけ 第50話

## 遺愛女学校 母の母校を訪ねて

今年(1998年)の6月末、私は姉と妻と一緒に93才の母の供をして、北海道函館市の五稜郭の近くにある母の母校の遺愛女学校(現遺愛学院)を訪ねました。

母は、大正11年(1922年)に、この遺愛女学校の2年生に編入しました。秋田市生まれの母は、子供のときから勉強が好きで、教師になりたいという夢を抱いていましたが、父を早くに亡くしたので、13才で東京に出て准看護婦の免状を取り見習看護婦になりました。病で苦しむ人を看病することを天職と信じ、患者さんたちからも感謝される日々生き甲斐を感じて懸命に働いていましたが、次第にもっと勉強がしたいという気持ちが抑えられなくなりました。母は、子供の頃から通った秋田の教会の島田牧師を父のように信頼し、上京してからも文通を続けて励まされていました。ある時、その手紙にもっと勉強したいという気持ちを正直に書きました。島田牧師は、いろいろの事情を考えて、ミッションスクールの遺愛女学校を勧め、その編入試験を受けられるように手を尽くして下さいました。丁度、勤めはじめた兄と姉が学費と寄宿舎の費用を援助すると言ってくれましたので、母は遺愛女学校に編入できました。すでに満17才でした。



母は、遺愛女学校の寄宿舎での生活を、よく私たちに話してくれます。遺愛の寄宿舎は平屋建てで、2人1部屋の8畳間の部屋が廊下の両側に20ほどありました。部屋に電灯がなく、冷暖房もありません。また、部屋毎の押し入れが無く、各自の布団は共同の布団部屋の棚に納めました。

規律は厳しく、平日は朝6時の起床から夜9時の消灯まで、ほぼ時間割りが決まっています。3度の食事は決められた時間に、食堂で舎監の先生方と一緒に摂りました。予習・復習は夕方と夕食後の夜9時までに自習室で済ませます。日曜日は日曜学校を手伝い、礼拝に出席し、夕刻の賛美礼拝に参加しますが、聖書と聖書関係の書物以外の読書は許されません。外出は週1回、月曜日の午後1時から4時までで、門限に遅れると次の外出が停止になります。今から思うとまるで修道院のようだったと言います。

母は、遺愛女学校に入ることができ、勉強する機会が与えられた嬉しさで、一心に学業に励みました。しかし母は、援助してくれた兄と姉の事情もあって、4年の1学期を終えた時点で、水戸高等女学校に転校しましたので、遺愛女学校にいたのは2年と3か月に過ぎません。でも、遺愛で勉強したことがよほど嬉しかったのが、その後の、就職、結婚、子育てと、戦争中の疎開と戦後の混乱期の度重なる引っ越しの中でも、母は遺愛女学校時代の10数枚の写真と成績表を、宝物のように大切に持ちつづけていました。

私たちが受付で案内を頼みますと、直ぐ応接間に通され、長谷川教頭先生にお会いすることができました。母は、長谷川先生に、遺愛女学校で学べたことを、今も心から感謝していると、在学中の思い出を話しました。

母が、試験の前の日などは、どうしても勉強がしたくて、夜消灯時間以後に布団部屋に隠れて、廊下の電灯の光で勉強したこと、もし見回りの先生に見つかると外出停止の罰を受けるので、足音が聞こえると布団部屋の隅に隠れて息を止めて通りすぎるのを待っていたと話しますと、長谷川先生は優しく、昔の寄宿舎は建て替えられましたが、当時の寄宿生だった先輩方からも同じような話をよく聞きます。あの頃は布団を頭から被り、その中で懐中電灯の明かりで勉強した人もいたようですね、と相槌を打っておられました。

それから長谷川先生は、本館の中の階段、講堂、静かな木立に囲まれたホワイトハウス(旧宣教師宿舎、北海道文化財指定)など、母の思い出の場所を選んで丁寧に案内して下さいました。母は、本館の磨き込まれて光沢を帯びた木の廊下、講堂への階段の彫り飾りの付いた手すり、毎朝礼拝をした講堂、前庭の大きく育った松や桜の並木、一つ一つに懐かしい思い出を確かめていました。

母は算数が得意で、私は小学生の頃に、鶴亀算や植木算などを教わりました。そのようなことを、母はこの場所で学んだのだと、私の幼いころ、母が炊事場で口ずさんでいた英語の歌のメロディを思い出しながら後について歩きました。

以上

参考資料:

『遺愛100年史』遺愛学院発行